# ご飯が食べられなくなったら どうしますか？

文・花戸貴司　写真・國森康弘

評　松田好人
名寄市風連国保診療所所長

「死」は誰にも等しく、必ず訪れるものだが、普段から考えている人は多くない。本書は、そんな当たり前だが、普段は忘れている大事なことについて、深く考えさせてくれる。

医師である著者が滋賀県永源寺地区で行っている活動が、写真とともに紹介されている。地域の人と暮らし、地域の人を「いい顔」にしている著者や、「いい顔」をしている地域の人々が写し出されている。

## 地域で「死」と向き合う

医療は老いに勝てないし、病にも常には勝てない。だからこそ病気になっても、「ボケ」てしまっても、その人を支えてくれる地域の存在が欠かせない。そこも含めて支えていこうとしている著者の医者としての力量に強く驚き、また共感する。

肺気腫の患者さんの話が出てくる。医学的には入院の方が正しい状況になるが、小学校1年生の孫娘といることが一番落ち着くからと入院しない。とりあえずその場は乗り切るが、徐々に衰弱し、自宅で亡くなった。その姿を孫娘は見続けることで、著者のいう「命のバトン」が受け渡されてゆく。「死」を体感することで「生」が活きるのだ。それはまた、医療者自身をも変えていく。

「穏やかに自宅で死を迎える」ことは、著者のような「良医」がいる恵まれた地域でのみ可能だと思うかもしれない。しかし、著者も最初から「良医」だったのではなく、地域の人たちに育てられ、気づかされて今に至った。北海道で地域医療を行っている私も、地域の人たちに我慢強く育ててもらって、著者と同じ思いに至り、地域の人たちとともに年を重ねている。

「死」は「生」の隣に必ずある。この本は、「死」と向き合い、自分が望む最後を迎えるための道標として読むことができる。願わくば「望ましい最後」の時には、支えてくれる「良医」と良き医療スタッフ、良き地域に恵まれていたい。それを願望に終わらせないためには、永源寺地区の人々のように、普段から「自分らしく生きる」ことの積み重ねが、良き医療者を育てることを忘れないでほしい。

（農山漁村文化協会　1944円）

はなと・たかし　70年生まれ。滋賀県東近江市永源寺診療所所長。
くにもり・やすひろ　74年生まれ。神戸新聞を経てフリー。